こうやブランケット ニュース 2025 vol.30 春号

チラシ見ていただいた方限定！
まとめ買いは相談に応じます。
詳しくは弊社まで連絡を！

米阪パイル織物㈱
和歌山県橋本市神野々 720
TEL: 0736-32-1404 / Mail : info@yyypile.com
営業時間：8:00～17:00（土日祝除く）

弊社 HP　商品の詳細は QR コードをチェック！

世界中の子どもたちに夢を！

2025 年に入り、世界情勢に変化の波が押し寄せている。トランプ関税により世界経済が振り回され、各国の代表が交渉のため次々にアメリカを訪問する異例の事態となっており、先行きが全く不透明だ。一方でウクライナ戦争の仲介を買って出ているが、終息の気配を感じない。国内に目を向けると、米やガソリンの高騰が続いている。政府が備蓄米を市場に放出したり、原油価格低下により石油元売会社への補助金を中止したはずが高止まり状態である。コロナ禍に比べると街中のインバウンドの数も増え、生活も元に戻った気がするが、社会全体が潤っていると感じるまでは程遠い。先日のニュースで、ウクライナの中学生の女の子が「勉強したって、役に立たない。戦争でいつ死ぬかわからないから。」と言って、自分の命を守るため、父親に本意ではないライフルの使い方を教わっている映像を見た。未来ある子どもにこんな絶望感を与えて、人類の未来はないと感じた。戦争を気にせず平和に暮らせる国のありがたさを改めて知った。

今年も大リーグに注目が集まっている。ドジャース大谷パパの二刀流再開は日本に限らず全世界の注目である。パパになった記念すべき年でもあり、何かやってくれそうで期待が膨らむ。大谷だけでなく、投手では山本、佐々木、メッツ千賀、カブス今永、打者では、カブス鈴木も滑り出しは悪くない。今年も世界の舞台で日本人の活躍から目が離せない。日本に限らず世界中の子どもたちに夢を与えてほしい。

万博

4 月 13 日より大阪・夢洲にて世界 150 を超える国の参加により開催した。初日こそ、天候不良で航空自衛隊ブルーインパルスの曲技飛行や空飛ぶクルマのデモ飛行が中止となり残念な滑り出しであった。大阪での開催は 1970 年以来 55 年ぶりとなる。シンボルである「大屋根リング」は世界最大級の木造建築だそうだ。釘などは一切使わず、柱とハリを垂直に組み合わせる日本の伝統工法「貫工法」で組み立てた。その大きさは、1 周 2km、高さ 20m で、上に立つと会場内の様子や大阪湾を一望できる。パビリオンの数は国と国際機関併せて 160 を超える。各パビリオンでは、世界中の文化や技術に触れることができる。前回では動く歩道が話題となったそうだが、アップデートした今回では、「空飛ぶクルマ」だろうか。今や AI 技術の進歩によりクルマの自動走行は当たり前になりつつあるが、スーツケースにその技術を取り入れ、自動で目的地に案内してくれる技術や、自分の健康データを入力すると、25 年後の自分（アバター）を表示してくれる技術も体験できる。今や主要駅などに多用されるデジタルサイネージ（電子看板）技術の応用で、各パビリオンが競って巨大映像（数十メートル四方）を駆使して自国の文化や芸術をアピールしているそうだ。万博の最寄り駅で地下鉄夢洲駅も近未来のイメージで創造された。訪問者が出会う 1 つ目のパビリオンのようだ。天井は折り紙をモチーフにデザインされ、改札の壁に幅 55m の超巨大サイネージには目を奪われる。照明の配置も創造性があり斬新だ。どんな未知との遭遇が待っているのか楽しみだ。

生きた化石

「生きた化石」という言葉は、誰もが 1 度は耳にしたことがある。身近なものでは、ゴキブリやイチョウ、カブトガニ、カブトエビといったものが挙げられる。ほかにカモノハシやイリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギなど数えると結構ある。中には、「えー、そうなの？」というものもあるだろう。生態学的に進化途中のまま止まっているという判断らしい。その中で認知度 100% と思われるのがシーラカンスだろう。約 6,600 万年前の白亜紀に絶滅したと考えられていた。しかし、1938 年に南アフリカで捕獲され、生存していたことに世界が驚愕した。その後、インド洋コモロ諸島とインドネシア沖のスラウェシ島近海の 2 か所にそれぞれ 2 種が生息することが判明した。水深 150～700m に生息し、その生態は不明。先日、NHK がスラウェシ島沖で 72 時間連続撮影でシーラカンスの撮影に成功した報道があった。 1 匹でも超珍しい魚が海底の岩陰に 8 匹も群れで生息している映像は、世界中が驚いたに違いない。普通の魚と違う特徴としては、ひれが 10 枚と多いこと。肋骨や脊柱が無く、背骨の代わりに体液に満ちた中空の軟骨から構成される。卵でなく子どもを産む（卵胎生）ところ。映像からは全身の緩慢な動きと胸びれと腹びれが、それぞれ手足への進化を彷彿させるような動きが印象的だった。川や海の浅瀬の陸に近いところで生息していた多くの仲間が全滅し、環境変化の少ない深海で暮らした現在の 2 種が生き残ったのは皮肉にも感じられる。目まぐるしい競争社会から離脱するのも成功の秘訣かもしれない。